

御土居跡出土の木製人形

— 多様なかたち —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

御土居は、天正19年(1591)豊臣秀吉によって京の町を取り囲むように造られた防御施設です。その中でも南区の油小路通に沿った八条通から九条通までの間では、御土居の堀から多数の木製人形が出土しました。

部位と名称 人形の頭部から首全体を「かしら」と呼びます。このかしらを支える棒(とぐし)と呼び、首の底面と胴串の上面に開けられた穴(くしあな)を串穴と呼びます。手に串穴が開いたものもあります。

作り方 かしらの製作には鋭利な刃物を用いて、細長い角材から頭部と首部を切り出しています。この時、角材の角が顔の正面になるように木取りにするものが多く見られます。さらに仕上げには胡粉を塗り、その上に顔を描いたと考えられます。材質は針葉樹で、ヒノキかスギでしょう。

多様なかたち 図1は、若い女性のかしらと思われま。額の上部に溝が彫られ、そこにコの字状のくさびが連続して打ち込まれています。ここに、髪を表現する繊維が埋め込まれていたのです。頭頂部にも一箇所木釘が埋め込まれています。これは、髪の毛の束を埋め込むためのもので、撚り(よ)をかけない絹糸を止めていたと考えられます。他のかしらに比べて全体



図1 若い女性のかしら(1:2)

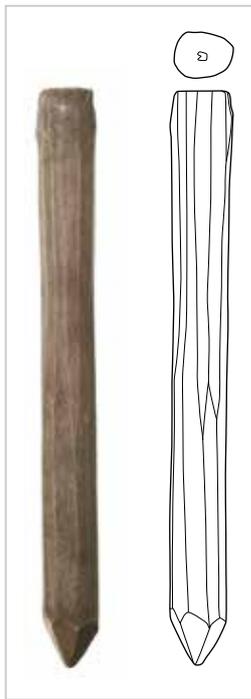


図2 胴串(1:2)



図3 首の長いかしら(1:2)

的に大振りで、首底面の串穴の径が大きいのが特徴です。

図3のかしらは髪の生え際にそって木釘を埋める穴が多数開いており、首が長く、首底面の串穴

が小さいのが特徴です。図4はしらびょうし(白拍子)を思わせるたちえぼし(立烏帽子)が特徴的なかしらです。首底面には、図3に類似した串穴が開けられています。これまでの人形研究では、

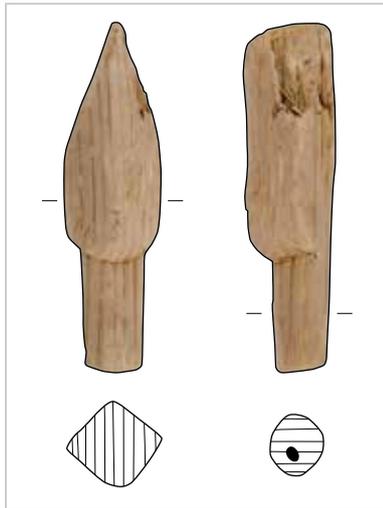


図4 立烏帽子のかしら（1：2）

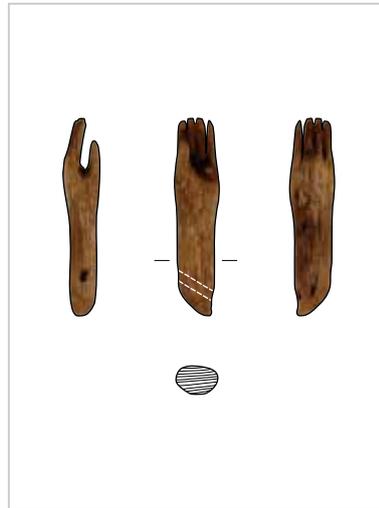


図5 人形の左手（1：2）

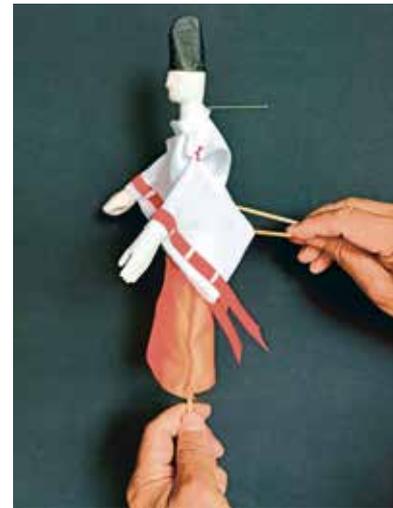


図6 串人形模型
加納克己氏（人形芸能史研究所所長）作

この串穴は、胡粉を塗り、乾かす際に竹串を使っていたためと考えられていました。また、長い首は人差し指と中指で挟み込むためのものと考えられていました。今回、かしら首底面の串穴が小さな例は、胡粉乾燥用ではなく、串が胴串の一部または全体の代わりをしていたということも推定できるように

なりました。

図5は人形の左手です。串穴が斜めに開いているのが特徴で、これに串を通すと図6のとおりに復元され、串で手を動かす操り人形が存在していたことが分かりました。操り人形の操作には、手遣い、糸操り、棒遣いなどがありますが、今回出土した串を用いた串人形も

存在していたことが明らかになった意義は大きいといえます。

図7は人形用の面です。年寄いた女性「姥」を表しています。側面には小さな穴が開いており、実物の面と同じように紐で人形の顔に取り付けたと考えられます。

図8は全身像を表した人形です。これまで述べてきた串人形とは違い、信仰のために作られた人形であった可能性があります。

図9はタヌキあるいはサルを表した小像です。側面には小さな穴が二つずつ開いており、可動式の手足がそれぞれに付けられていたと考えられます。底面には串穴があり、操り人形として用いられた可能性があります。

図10はネズミを表した小像です。尻尾がつく穴と、底面にはやはり串穴があります。タヌキあるいはサルと同様に操り人形として用いられた可能性があります。

以上は御土居堀から出土した中でも代表的なものです。ひとくちに木製人形といっても多様な形があることが、写真からお分かりいただけると思います。（関広尚世）

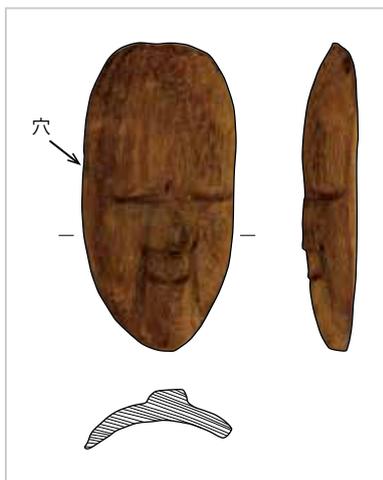


図7 姥（1：2）

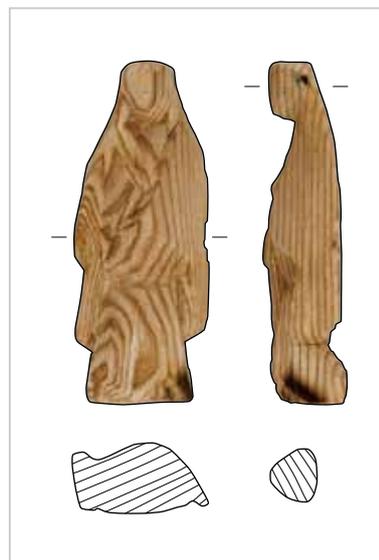


図8 全身像（1：2）

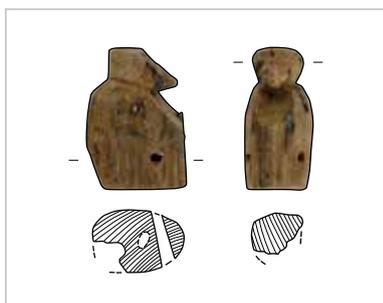


図9 タヌキあるいはサル（1：2）

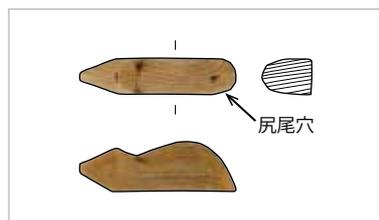


図10 ネズミ（1：2）